Lunatic（旧・春秋零下）

四月朔日澪

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

坂下眞一には２人の幼馴染みがいた。活発な少女・木原るなと家庭的な一面を持つ・桑野瑠奈。同じ名前を持つ少女たちと送る田舎を舞台とした青春群像劇。

目　次

冷たい　1
水面　5
湖面の月　8
汗まじり　12
センタク　15
暁天の月　18
登校日　22
２つの月　26
月蝕（前編）　33
月蝕（後編）【終】　41

冷たい

垣根の向こうには見慣れた田んぼと山々が見える。見ていても面白くはないが縁側でこうしてアイスバーを食べているので目に入る。

「にい、アイス溶けてる」

小学生の妹が隣で甲斐甲斐しく太ももに滴った溶液を拭いてくれた。少し前ではなかったことだ。それまでの妹の態度というのは「うるせー馬鹿」と言われたり舌打ちされたりと第二反抗期のそれであった。

あの出来事が起きるまでは

その日を境に妹の態度は一変した。事あるごとに俺のそばにいるようになり、出掛けるときにもついてくるようになった。ただアベックのような付き添いとは温度が違う、監視だ。二度とあんな真似をしないように俺を監視する無機質なものだ。

昼前というのにこの暑さだ。クーラーはあるが飾りと化しており、扇風機で我慢をするしかない。隣にいる妹のこめかみにも汗がにじんでいる。濡烏の長髪が見ていて暑そうだ。見ていると不思議そうに見返してきて目が合う。

「？」

「あ、いやお昼は冷蔵庫に入ってるって。」

反応するわけでもなく垣根に目線を向けアイスを食べていた。うんともすんともいうわけでもなく首を振ったりかしげるわけでもない、そんなやり取りが毎日続いている。一緒にいても寂しいというか虚しいというか・・・

「まりちゃーん」

引き戸が開く音が遠くからした。妹の友達のようだ。うちの田舎に小学校は一つしかなく全校生徒は１００人にも満たない。なのでこのような田舎では同級生の全員と男女関係なく友達である場合が多い。

「いらっしゃい」

「宿題持ってきたよ！算数分かんないから教えて」
「いいよー私も理科が分からないから教えてー」
うん、いいよー。などと先ほどとは打って変わって無邪気に話している。俺の時だけつれない態度なのだ蚊帳の外だ。一緒にいるはずなのに疎外感、寂寥感・・・・ なんでこんな気持ちにならなければいけないのか。
まぁ友達が来たんだ。木原の家にでも行こう、俺も全く宿題が進んでいないからな。
俺は手提げバッグに筆箱やら宿題を詰め込んだ。すると妹が近づいてきた。
「にぃ、どこ行くの？」
「ん？木原の家に」
行くところなんてたかが知れてるだろうと思うが。
「なんで？」
「勉強見てもらおうと思って。麻莉たちの邪魔になるだろうし」
「邪魔じゃないよね？みくちゃん」
「うん！」
麻莉は美久ちゃんに同意を求めるように訪ねた。美久ちゃんも無邪気に同意した。
「ほら、みくちゃんもそういってるし。それともどうしても行かないといけない理由でもあるの？」
なに知れぬ圧迫感が俺を襲う。妹の目は黒く濁っているように見えた。その眼窩には何をとらえているのだろうか。
「な・・・・ ないけど」
「にぃは私のそばにいないとダメなんだから・・・
あの女ににぃは渡さない・・・（ボソッ」
俺は諦めて二人の傍らで宿題をしていた。繋ぎ留められたが別に勉強を見てもらおうという気もなく刻々と時間は過ぎていく。暇だから読書感想文の本でも読むか。
「お昼ごはん食べてから一緒にプールに行こー」
「うん！」

お昼になり二人はいったん別れた。集落というのは家が密集しており、歩いてすぐのところにいるので行き来は小学生でも楽である。美久ちゃんが帰ると妹は自分の分の昼飯を冷蔵庫から取り出しレンジにかけていた。もちろん俺の分を出してはくれない。別にして欲しいわけではないがついでにやってくれてもいいじゃないかと思う。

ジャーからご飯をよそいで妹に渡す。会釈だけして温めたおかずに手をつけていた。俺は少し遅れて飯をとった。

昼食を終え、妹がプールに行く用意をする。こんな田舎では夏の娯楽など家でゲームをするかプールに行くかくらいである。しかし、家には爺様方がいるので外で遊べと五月蠅いので大抵みんなプールに行く。

「にぃ何してるの？行くよ」

麻莉はプールバッグを持って催促した。

「え？俺は家にいるよ」

「指導員の仕事は？」

「どうせ誰かいるだろ」

暑いのはごめんである。指導員は俺のような中学生がやることになっている。持ち回りではなく、自発的活動なので必ず行く必要はない。

「・・・　いこ？」

麻莉はねだるように言ったが、乗り気にならない。

「んー」

優柔不断な態度を取っていると妹はつまらないおもちゃを見るような目で一瞥した後、何も言わず外に出た。取り繕うように行くよ。といったが妹は無視して小学校に向かう。不貞腐れてるのだろう。

美久ちゃんと合流し、プールに向かう。俺はその前に学校にカギを取りに行った。

「こんにちは」

「おー元気にしてるかね」

「校長先生」

職員室に入ると小学校の校長先生がいた。

「麻莉ちゃんから話を聞いて心配したが元気そうでよかったよ」
「心配をおかけしてしまいすいません。プールのカギを借りに来たのですが」
「カギなら桑野くんが持って行ったよ」
「瑠奈が来てるのか・・・ ありがとうございます。それでは失礼します。」
「あぁ桑野くんにも指導員お願いしますと言っておいて下さい」
　桑野瑠奈は俺の同級生で弟も麻莉と同級生である。家庭的な性格で木原とは大違いだ。
「あ、シンちゃん」
　プールサイドへ行くと瑠奈が監視台に座っていた。「代わるよ」といい、交代した。瑠奈は台の下、つまり隣に立っていた。
「すまんな。まかせっきりで」
「ううん。どうせ暇だし」
「指導員だって暇だろ」
「えーそんなことないよ。子供たち見てると元気をもらえるきがするしね」
　瑠奈は聖母のようなほほ笑みで返した。
「年寄りみたいなことを言うな」
「まぁ本当はシンちゃんに会えるからだけど・・・（ボソッ」
「？」
　小学生たちの声でかき消されて聞こえなかった。そのあと「あ、なんでもないよ」といっていたし大したことではないんだろう。指導員といっても２５ｍプールで溺れるなんてほとんでないので基本暇な仕事である。交替で監視台に上って雑談をしていた。その一方、その様子を遠くから伺う少女がいた。

「・・・・・・・・・・ チッ」

水面

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「シンちゃん、好きです。付き合って下さい」

それは放課後の図書室でのことであった。同級生の瑠奈と委員の仕事をしていたときであった。俺は戸惑った。瑠奈は確かに俺に優しいしクラスでも聖母のような存在だ。でも、付き合う・・・ 想像がつかなかった。

「少し・・・ 少し考えさせてくれないか？」

「うん！幾らでも待つよ。」

その様子を木原は憎々しく見ていた

「・・・・・・・ チッ・・ シンは私のなのに・・・ 抜け駆けなんて許さない・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

プールに来てから1時間ほどが経ったときだ。

「麻莉、もう帰るのか？」

麻莉はそっぽを向いて更衣室に向かった。

「シンちゃん一緒に帰らないの？」

「一緒に帰らないと行けないほど小さくないだろ。もう高学年なんだし」

「でも・・・ あ、まーちゃん」

麻莉が前に立っていた。不機嫌そうにこっちを見ていた。

「にい、帰ろ。アイス買いたい」

「まだ仕事あるし、お金渡すから・・・」

「こっちは大丈夫だよ。一緒に帰ってあげて」

「済まない。今度ちゃんとするから許してくれ」

麻莉に引っ張られ、プールサイドを上がった。

「・・・・・・・・ ほんと邪魔。あいつがいなきゃシンちゃんは・・・」

学校を出ようとしたとき、校門に茶色がかった髪にショートカットの少女がいた。

「シン！やっぱりここにいた。今日一緒に勉強するって約束だった

じゃない」
「あっ木原そんな約束してたっけ？」
　実際そんな約束はしていない。事実木原はずっと眞一のことを遠くから見ていたのだから。
　麻莉が眞一の裾を無言で引っ張る。そして後付けのように「アイスはいいから帰ろ」と言った。麻莉は木原の事が苦手である。何かにつけて眞一と木原がくっつく事を妨害している。
「一旦家に帰ってからそっち向かうよ。」
「わかった。早く来てよね。わざわざ学校まで出向いたんだから」
「そうだ！アイスおごってやるよ。妹も食べたいみたいだし」
　木原も誘うと麻莉は足早に去ろうとした。
「麻莉、アイスはいいのか？」
「いらない」
　そう言い、麻莉は木原の答えを待たずに帰っていった。
「気をつけて帰れよ…それじゃ駄菓子屋によってから木原の家に行こうか」
「私もいいや。早く家にいこ」
　２人は家に向かった。木原の家は眞一の家とは歩いて１０分ほどの所にある。昔からそれぞれの家を行き来していた。
「勉強道具何も持ってきてないけどいいのか？」
「どうせ勉強なんてする気ないでしょ」
　木原はゲーム機の電源を入れた。
「今日こそはシンに勝つんだから」
「ほう。俺に勝とうなんて１００年早い」
　格闘ゲームをここ数年木原とやっている。あまりにも弱いので手加減すると「真剣にやってよね」と怒ってくる。何勝負かしていると木原が口を開いた。
「そういえば、なんで私のことは名前で呼ばないの？」
「だってそれは・・・」
「同じルナだから？」
　木原るな、それが彼女の名前だ。桑野瑠奈と同じ名前である。別に

意識などしていなかったが桑野の方を「瑠奈」と呼び、木原は「木原」と呼んでいた。
「じゃあ、なんで私は苗字なの？ねぇ？」
珍しくつまらない事で詰問してきた。小学生の頃は名前で読んでいたが、今呼ぶのは恥ずかしい。
「・・・」
「理由がないなら私をルナって呼んでよ。くーじゃなくて私を」
「別に呼び方なんて・・・」
「関係あるよ！くーのこと名前で呼ぶのはくーがシンのこと好きだから？」
「ちげーよ・・」
言い終わる前に木原は核心をついてきた。俺は強く反論できなかった。
「それに『あのこと』を忘れたわけじゃないよね？」
「・・・」
俺と木原は『あのこと』で縛られている。それは決して破ってはならないことだ。
「ほら、分かったら呼んでみて？るなって。私のことを」
木原は不敵な笑みを浮かべる。
「る、るな・・・」
「シン♡」
久しぶりに呼ぶ幼馴染の名前はどうも違和感を禁じ得なかった。

湖面の月

夏休みはまだまだ始まったばかりだ。それを示すのがこのラジオ体操カードである。表裏面とあり、もう幾つ体操をすれば夏休みが終わるかが分かる。

眞一は朝に弱いので朝早いラジオ体操など行きたくないのだが、麻莉に「にぃ、行く」と叩き起こされ眠い目を擦りながら神社の境内に向かう。

「おはようシンちゃん、まーちゃん」

「おあおう（おはよう）」

眞一は生あくびをしながら返した。麻莉も朝なのにクラスの子に元気よく挨拶をする。

「おはよう、シン。珍しいわねあんたが早起きするなんて」

木原は朝から元気だった。まぁなんとなくわかる気がするが。

「麻莉に叩き起こされたんだよ‥」

「そんなこと言っちゃダメだよ。まーちゃんもシンちゃんと行きたかったんだよ」

「チッ‥‥ いいこぶりやがって（ボソッ

ふーん、まぁ夏休みなんだしこれを気に健康的な生活をしなさいよ」

「勘弁してくれ‥‥ 低血圧なのに」

「まぁ安心しなって。2学期になったらまた私が起こしに来るから」

夜ふかしはしないのだが、朝は苦手だ。学校があるときはいつも木原に起こしてもらう事が日課になっている。

「‥‥‥ にぃ、はじまる」

木原と談笑をしてると麻莉が遮るように手を引っ張って体操場所に誘導した。

『今日は栃木県‥‥‥ 緑がとても美しく空気がとても美味しいです‥‥』

「シンちゃん、ラジオ体操の中継場所にうちの村は来るかな??」

「来ないだろ。田舎だし」

うちの村は村民合わせて２０００人未満である。一番大きな体操場所である総合運動場でも流石に中継になど来ないだろう。
「シン！ちゃんとやりなさいよ」
木原が突っかかってきた。別に俺が悪いわけじゃないのに
『右左3、４大きく腕を振って・・・ ～』
腕を振る運動で木原を見る。現在進行で発達中のたわわは大きく揺れている。男子中学生がラジオ体操に行くためにはこれくらいの楽しみがないといけない。
「シン！どこ見てんのよ。このヘンタイ！」
「バッ・・・ 見てねぇよ」
「ふんっ」
嫌われてしまっただろうか。もう一度木原を見ると、
「シン・・・・ その、別に怒ってないから・・」
「るな・・・ そのごめん」
「いいよ、シン♡」
「シンちゃん、いつからるなのこと名前で呼び始めたの？いつも木原って言ってるのに」
瑠奈も木原をるな、と呼んでいる。俺が名前で呼ぶことにとても驚いていた。そりゃそうだよなぁ昨日から呼び始めたんだもの・・
「ずっと前から呼んでたわよ。ね？シン？」
「シン」の言葉の圧が凄かった。別にいつから呼んでてもいいと思うんだが・・
「う、うん」
肯定とも否定ともとれる返事をした。これで嘘はついていない。が、木原は凄く不満そうだった。
「そーなんだー。瑠奈とるなで訳わからないねー」
瑠奈はあっけらかんに答えた。瑠奈はそういうことには固執しないからな。
「・・・・」
木原が無言で体操をしていたのは逆に不気味だった。
ラジオ体操第二までやらされ時刻は６：４０だった。ＮＨＫニュー

スが流れるなか、小学生がおじさんにスタンプを押してもらっていた。
「シン・・・ 終わったら旧校舎まで来て」
「ご飯食べ終わってからじゃ・・・」
「すぐ来い」
普段の木原とは違い、殺気立っていた。触らぬ神に祟りなしだ。黙って従おう。
「・・ 分かったよ」
「にい、帰ろ」
「麻莉、先に帰ってて」
「いや」
「きは・・・ るなと用があるんだ」
麻莉はため息をつき、家の方向へと向かった。俺は木原の後をついていき旧校舎の裏に向かった。
旧校舎というのは尋常小学校の跡で神社のすぐそばにある。それらが集まって今ある小学校になったと聞く。
木原は足を止め眞一に立ち向かう。
「なんであんな曖昧な返事したの？シン」
目が怒っていた。手には地面に落ちていた木の棒を持って。
「そ・・・ それは瑠奈に嘘をつきたくなくて」
「るなは私でしょ！くーのことを名前で呼ぶなっ」
木原は思いっきり棒で俺の頭部を叩いてきた。
「痛っ・・・・」
「だってくーも言ってたよね？紛らわしいって。じゃあ、私のことをるなって呼ぶんだからくーは桑野でいいよね？」
「る・・・ 桑野は他意はなかったと思うぞ・・・ 別に一緒でも」
木原はもう一度木の棒を振り上げた
「私が嫌なの！私はシンにとって特別な存在じゃなきゃ・・・ いつもくーと比べられてきた・・・ でもシンは私の良い所を褒めてくれた・・・だから私だけ見てよ！シン」
「やめて！」

草かげから麻莉が現れた。木原の目の前に立ちはだかる。
「にぃをいじめちゃだめ！・・・・ にぃ、帰るよ。」
俺は麻莉に手を引かれながら帰路についた。振り向くと木原は泣き崩れていた。
「嫌われちゃった・・・・ ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・

汗まじり

麻莉に手を引っ張られるまま家に着いた。母には「どうしたの？そのケガ？」と聞かれたが「ボーっとしてたら木にぶつかって‥」といった。麻莉は何か言いたげな目でこちらを見ていたが木原がしたと言わなかったことが不幸中の幸いだ。別に木原のことを怒っていない。ただ‥‥

『嫌われちゃった‥‥』

振り向いたときに見えた木原の姿が脳裏に浮かぶ‥‥

その後、麻莉が手当てをしてくれた。手当てといっても絆創膏を貼ってくれただけだが、それも動物柄のかわいい。こういう柄物はすぐに剥がれやすいのであまり好きではないのだが‥‥

「にぃ、行かないよね‥‥？」

「えっ‥」

「木原さんち」

木原の様子を見に行きたかった。このまますれ違ったままいたくない‥‥そんな気持ちを見透かしたように麻莉は行かせたくないのか釘をさす。

「ダメだよ。にぃに酷いことしたんだから」

「‥‥っ」

「ダメったらだめ‥‥行ったら嫌いになる」

「‥‥‥」

午前中は麻莉と宿題をしていた。木原のことで全く進まない。7月もあと2週間、ワークは終わらせてしまいたいがペラペラと捲ると手をつけていない頁がまだまだある。自由研究もあるのに‥‥

午後、連れて行かれるようにプールに向かった。今日も瑠奈が補助員に来ていた。

「シンちゃんも毎日律儀だね～‥‥ってどうしたの？そのケガ」

「ははっちょっと打ってな‥」

絆創膏の部分を軽く撫でる。瑠奈にも言えずプールを眺めるだけの時間が過ぎていく‥‥

「シンちゃん、浮かない顔して何かあったの？」
「そ、そんな顔してるかな？」
急いで取り繕ったが瑠奈には誤魔化せなかった。
「るなと何かあったの？」
「・・・・ っ、流石に瑠奈には嘘はつけないよな・・ 実は」
木原に殴られたこと、瑠奈の発言によって起きたことを伏せて瑠奈に話した。
「そうなんだ。私のせいでもあるよね・・・ シンちゃん、るなの家に行ってあげて。るなの傷を癒せるのはシンちゃんしかいないから・・」
「・・・ でも」
「まーちゃんのことなら安心して？私が送ってくから。それにまーちゃんに嫌われても私がその倍・・・ ううん、その百倍愛してあげるから・・」
「・・ ／お世辞でも嬉しいよ」
「本当なのにな・・・（ボソッ」
「え？」
「ほら、るなに家に行ってきて。」
「あぁ、また任せっきりでごめんな。」
「気にしないでよ。また今度私のうちに遊びに来てよ！」
「あぁ！」
眞一はプールを後にし、木原の家まで走った。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「こんにちはー」
田舎は鍵がかかってない家庭がほとんどである。泥棒は見れば分かるし、在宅率が高いので施錠する必要性がないのだ。ゆえに人の家に上がるときはドアを開けて挨拶をする。
「あら、眞一くん。大きくなったわね」
「るなのお母さんこんにちは。るなはいますか？」
「それがね・・ 朝帰ってきたら泣きながら部屋に入っていってそれから部屋から出てこないのよ」
「そう・・・ ですか。るなの部屋に行ってもいいですか？」

「ええ。ゆっくりしていって」
「ありがとうございます。それではお邪魔します」
木原の部屋は2階あがってそばにある。部屋は重く閉ざされていた。
「・・・ るな」
「・・・・・・・」
返事はなかった。
「俺、今日のこと怒ってないから・・・・ 朝すぐに謝りに行きたかったけど遅れてごめん・・・・ るなを泣かせちゃって・・」
「入って・・・」
か細い声で木原は手招く。ドアを開ける、鍵はかかっていなかったようだ。
部屋は暗かった。カーテンが閉められていてしかも冷房も入っておらずサウナのような暑さだった。暗闇の中で木原を探していると、突然唇に柔らかい感触がした。
木原が俺にキスをしていた。首に手を回され、胸や脚が触れている。木原の目は焦点があっておらず吸い込まれるような眼だった。
クッチャバッチュヂュヂュ・・・
口内には塩味がした。木原から流れる汗が肌をつたい唇に寄せられる。肌も汗が滲んでいてベタベタしていた。
プハッ
「これで許してあげる・・ それと・・・ 私も気を起こしてごめん・・・ くーだけがルナって呼ばれるのが許せなかっただけなの・・ だから嫌いにならないで・・」
「嫌いになんかならないよ」
「じゃあ、好き?」
「き、嫌いじゃない・・ 友人としては好きだよ」
言葉を濁した。
「・・・ 友達か・・ 汗かいちゃった。シン、お風呂に入ろ」
「は?」

「シン・・ お風呂入ろ」
「は？」
　まだ突然のキスから頭の整理がついてないというのにとんでもないボディブローを食らったような気分だ。
「私、汗でベタベタだからさ・・・」
「なら、一人で入ればいいじゃないか。俺は帰るよ・・」
「待って・・・ 帰らないでよ・・・・」
　木原は今にも泣きそうな声を出し、帰ろうとする俺の腕を掴んだ・・
「・・・・・・・ 帰らないで」
「はぁ・・・・ 分かったよ。待ってるから入ってこいよ」
「一緒に入ろうよ着替えはお父さんのがあるし」
「バカっ何言って・・・」
「何恥ずかしがってんのよ。つい最近まで一緒に入ってたじゃない」
「お前・・ 俺はもう中学生だぞ。女となんて入らねぇよ」
「・・・・」
　木原は笑顔から一点真剣な目をした。
「な、なんだよ」
　木原は俺に顔を近づけてきた。
「・・ シン、絆創膏取れかけてる・・・」
「え？ああ別にいいよ。大した怪我じゃないし」
「ダメだよ。膿んだりしたらどうするのよ・・ 私がやったんだから手当てさせて・・・

　でもぉその前に体をきれいにしないとねっ！」
　冷静な口調で話したかと思えば取ってつけたようにいつもの調子に戻った。
「分かった、分かったよ。風呂に入ればいいんだろ、入れば・・ ったく。でも、お前と一緒はごめんだぜ」
「もう正直じゃないんだから・・ 私は別に気にしないのになぁ・・・」

木原は見せつけるようにランニング（女性のはノースリーブというのか）の襟を掴んでヒラヒラさせている。雨粒のような汗が流れていてとても興奮した。
「俺が気にするんだよ‥ ほら下に下りるぞ。お母さん心配してたぞ」
「はーい」
木原は間延びした返事で階段を下りる。
「あら、眞一くんるなを引きずり出してくれたんだ」
階段を下りるとすぐに台所を出てきたのだろう木原の母と出会った。
「はい‥‥」
「お母さん、シンとお風呂に入るからお父さんの服出してあげて」
「おい、誰もお前と入るなんて！」
「お父さんの着替えじゃブカブカじゃないかしら‥‥ ちょうどいい男物を探してみるわ」
いや、お母さんまず一緒に入ろうとしてることに何か疑問を持ってください‥‥ 聞こえてなかったのか？いや、俺は突っ込んだし木原は何気に腕を組んできてるし‥
「ほら、シン行こ‥」
「ちょっ‥‥‥ るな」
俺は木原と背向かいに着替えていた。狭いというのと先に入らせれば一緒に入らなくて済むと考えて木原が着替えるまで待っていたら「何してるの？シン早く着替えなよ」と言われた。逃れる術は無くなった。
こうなった木原は止められない。とっとと体を洗って上がってしまおう‥‥
チラっと後ろを見ると木原はブラウスを外そうとしていた。肉付きのいい背中と美しい背骨が目に入る。タグを外そうと手を後ろに回していた。
「シンー先に入ってていいよー」
「え？ああ」
見ていたことはバレていないようだ。男の着替えなんてすぐに済

むのでノロノロしてるのを待ってると勘違いしたのか・・ こんなことをしている場合じゃない木原が入ってくる前に上がれる準備をしてしまおう。
俺は入るとすぐに頭を洗った・・・ あれ？泡立たないなんだこれ・・・
「何やってんのよシン・・・ それコンディショナーよ」
目を瞑っていてわからないが、木原が入ってきたようだ。声からも呆れ顔をしてるのが容易に思いつく。
コンディショナー？全く聞いたことのないワードだ。ともかくシャンプーではないようだ。
「頭洗ってあげる・・・ 嫌とは言わせないよ？」
返事を封殺された。俺は黙って頷いた。
「それにしてもシンとお風呂に入るなんて2年ぶりじゃない？あのときは小学生だったけど」
「あー、そうかも知れない」
昭和な感じだが、しばらく前まで木原の家に風呂を借りていた。木原とは保育所の頃から入っている。
木原はお湯を流し、背中を洗ってくれていた。
「るなにはいつも身体を洗ってもらってたなー麻莉の髪は俺が洗って・・・」
突然、木原の手が止まった。
「今、麻莉ちゃんの話はどうでもいいでしょ・・」
「え？」
木原の姿は分からないが、声のトーンが下がったのは分かった。
「私の前では他の女の話・・・ しないでよ・・ 妹のことでも」
「・・・・ るな？」
「ね？」
風呂場の温度が少し下がった気がした。

暁天の月

早朝のラジオ体操が終わり、スタンプを待つ。スタンプの順番は低学年からなので中学生の眞一たちは一番最後になる。
「ほんと、中学生にもなってラジオ体操に行かないといけないなんて本当田舎よね・・・」
木原が愚痴をこぼす。うちの中学では最低一週間はラジオ体操に行く義務があり、ラジオ体操カードを提出しないといけない。
「でももう二週間だし、いいんじゃないか？俺は麻莉に叩き起こされるから毎日行くことになりそうだけど」
「何？私に来ないで欲しいって言いたいわけ？」
「なんで怒ってるんだよ。ただめんどくさそうにしてるから・・」
「別に・・・・ 怒ってないし、シンが来るなら毎日来てもいいかな・・」
「まぁ一人だけって気恥ずかしいもんな・・」
「そういう意味じゃないんだけどな・・」
木原はなにか呟いていたが、喧騒にかき消され聞き取れなかった。
「ねえ、シンちゃん。今日私のうちに来ない？宿題提出もうすぐでしょ？私が見てあげる」
「そうだな。ずっと誘いを断っていたし、お昼行くよ・・・ あ、でも瑠・桑野は今日指導員はいいのか？」
「大丈夫だよ。今日は公民館の人がやってくれるみたいだから」
「・・・・・・・」
俺が桑野と会話をしてる間、木原はこちらを睨んでいた。
「分かった。じゃあまたな」
「うん。待ってるね」
１０時以降にしか外出してはいけないという夏休みの制限がある。よく分からないが、午前中に最低限の勉強時間を確保するためだという。しかし、夏休みになると午後に起きるような子もいるのだから無意味な気もする。
眞一は午後に瑠奈に教わるので午前中は読書感想文の小説を読むことにした。しかし捲る手は全く進まなかった。昼食を食べた後、勉

強道具をバッグに詰め込み瑠奈の家に向かう。瑠奈の家は歩いて木原の家同様近所で歩いて一分ほどの所にある。
「おじゃましまーす」
　しばらく沈黙が訪れる。誰もいないのだろうか？
「・・・・どちらさん？」
「あ、おじいちゃん。えーと瑠奈さんに用があるんですが・・」
「瑠奈・・・？」
「どうしたのおじいちゃん？あ、シンちゃんいらっしゃい。どうぞ上がって」
　認知症の瑠奈のおじいちゃんに困惑していたところに瑠奈がやって来た。数年前はとても元気で優しくしてもらったが、今や俺どころか瑠奈のことも分かっていない。
　瑠奈に案内され部屋に入る。本棚には少女漫画、ファッション雑誌などがあり部屋の真ん中にはローテーブルのあるイメージ通りの女の子らしい部屋だ。しかし、それに似つかわしくない男の汗臭い匂いがするのは何でだろうか・・・そんなこと当人に言えるわけもないが
「どうしたの？座って」
「う、うん」
　ローテーブルを囲うように座る。木原の部屋はもっと殺風景なのでこういう女子らしい部屋は慣れない。
「どうしたの？楽にしていいよ」
「いや・・・その女の子の部屋っていうのは落ち着かないものだなって」
「あんまり、ジロジロ見ないで欲しいなぁ・・」
「あ、ごめん。るな以外の女の子の部屋って入ったことないから。」
「今飲み物持ってくるね♪（シンちゃん、私を女の子として意識してるんだ・・・♡）」

　眞一の隣に瑠奈が座り、勉強会が始まった。
「シンちゃん、宿題すすんでる？」
「ワーク類はだいたい。るなのうちにも行って教わってるからなぁ」

「思ったんだけどさ・・・・」
　瑠奈がいつにもなく暗い声調で語りかけてきた。
「ん？」
「私といる時ぐらい瑠奈って呼んでほしいな。るなが私のこと名前で呼ぶの嫌がってるのはわかるよ？でも、るながいない時は私のことを瑠奈って呼んで・・・？
　わがまま・・・かな？」
「ごめん・・・・その・・瑠奈、ここを教えて欲しいんだけど」
「え？どこどこ？」
　瑠奈がワークを覗き込むように密着してきた。思春期の男子には刺激が強いものだった。
「・・・・・・／　　・・・・・・／」
「シンちゃん、疲れちゃった？」
　密着する時間が長く意識が朦朧としていると瑠奈が心配してきた。疲れたともまた違うが。
「・・・／あっ大丈夫」
「ご飯食べたあとはつい眠くなっちゃうよねっもし眠くなったら横になってもいいよ」
「人の家でそんなことできないよ」
「るなの家では風呂に入ったのに？」
「な、なんでそれを！」
　俺は驚いた。木原がそんなこと喋るわけもないし、一体どこで知ったんだろうか。
「前、おつかいに行ったときにるなのお母さんに聞いたの。」
「あぁ・・・」
　合点がいった。木原のお母さんなら話しそうだ。
「ふふっ別に恥ずかしがらなくても。私とも入る？」
「からかうのはよしてくれよ。」
「からかうって何？・・・・・・・・・・・・私とじゃ嫌・・・なの？
　るなはよくて私と入るのは嫌なの？」
「瑠奈・・・・？」

冗談だと思い、軽くあしらったつもりだったが瑠奈は焦点の合わない瞳で眞一を捉えた。
「どうなの？答えてよ!!!」
突然のことに驚いていると、煮え切らぬ態度に瑠奈は激昂した。こんな桑野は初めて見た。
「い・・・・・・ 嫌じゃないよ」
恐る恐る答えた。いや、そうとしか答えられなかった。
「ふっ・・・・ ならよかった。ごめんね怖がらせちゃって」
答えたときには普段の優しい瑠奈に戻っていた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
夕方になり、カラスも寝床に戻ろうと飛び立っていた。
「今日はありがとう」
「また明日ね。シンちゃん」
眞一を見送り瑠奈は部屋に戻ると床に這いつくばって何かを探していた。
「あった・・・・ シンちゃんの髪の毛」
瑠奈は学習机の本棚においてあるくまのぬいぐるみを持ち裏に向ける。くまの背はパッカリと開いており中には綿ではなく真っ黒な短めの髪の毛がぎっしりと詰められていた。
「シンちゃん人形ももうすぐ完成しそう・・・・ ふふ」

登校日

今日は中学校の夏季休暇間登校日だ。国数英のワークを提出するだけで午前で終わるのはありがたい。今日は小学校も登校日なので朝恒例のラジオ体操はお休みだ。ちなみにお盆休みも休みで８月中のラジオ体操は数週間と残されたほどだ。

自転車で中学校に向かう。登校中に被る白いヘルメットがとてもダサい。こんな工事現場の人がしてそうなヘルメット以外にもっといいデザインのヘルメットがあるだろう。本当に田舎はセンスがない。

「遅い！」

「ごめん」

るなの家に着くと既にるなが自転車に跨って待っていた。今日はラジオ体操もないので麻莉は起こしてくれず遅刻寸前だった。急いで家に出たので服装も整っていない。るなが「まったく・・」と呆れながら寝癖を直してくれる。

「こんな格好で学校行ったら熊谷にどやされるよ」

熊谷とは生徒指導の教師だ。こんなクソ暑い中でも校門で生徒の服装を指導する暇な先生だ。一度捕まったら１０分ぐらいは外に拘束される。俺は汗を噴き出しながらシャツを入れたりと身だしなみを整えた。

「ほら行こ。シンのせいで遅刻しちゃう」

「ああ」

〜〜

「「おはようございます」」

「おはよう。今日少し遅いぞ急げぇ」

熊谷はやはり校門に立っていた。自転車に乗りながら挨拶をして、校舎から少し離れた駐輪場に向かった。朝とはいえ、夏にヘルメットは頭が蒸される。特に女子なんて髪に変な臭いが付くから嫌じゃないだろうか。るなは汗を浮かべながら心底嫌な顔をしてヘルメットを脱ぐ

「ほんとなんでこんなヘルメットしないといけないんだろ・・・ ああもう髪ぼさぼさになっちゃう。」
「別に気にするほど乱れてないけどな」
「ん。ならいいや。ほら行こ」
るなは手を引っ張って来た。俺はるなに連れていかれるように校舎に入っていった。
「じゃあ、またお昼ねシン」「じゃ」
るなと玄関で別れ、俺は教室ではなく職員室の方向へ向かう。
「先生、これ宿題提出に来ました。」
「ああ」
国語と英語、数学の先生それぞれを回って宿題を提出する。普通のクラスだと係が纏めて始業前に先生に提出するものだが、俺は一時限目が始まるのを見計らって先生に提出する。それには訳がある・・・
宿題を提出し終え、俺は職員室を出てすぐの「生徒相談室」という表札がある教室に入る。ここが俺の教室だ。
「おはようございます。」
「おはよう。眞一くん」
教師机には水島先生が座っていた。水島先生はこの生徒相談室のヌシであり、社会科の教師でもある。先生の中では若く、生徒にもため口で気さくに話すので生徒の間でも人気の先生だ。学内は禁煙のはずだが隠すそぶりもなく煙草を手にしていた。
「先生、ここ禁煙じゃ・・」
「いいのいいの。バレなきゃ、それに俺が高校んときなんて先生みんな職員室でスッパスッパ吸ってたよ。」
「いや、でも窓開けないとスプリンクラー作動するんじゃ・・」
「あ、やっべ。また教頭に叱られんじゃん」
急いで灰皿で火を消し、窓を全開にした。以前も窓を開けずに火災報知器が全作動し、学校が大騒ぎになったことがあった。校長と教頭にとても怒られていたが、生徒たちは避難訓練気分で授業もさぼれて逆に感謝していたぐらいだ。
「んで、眞一くんは夏休みの思い出何かあった?」

「何もないですよ。何処にも出かけませんし、桑野と木原の家に行き来するくらいしか」
「なんだなんだ、せっかくの夏休みなんだから海とかに行けよ～Ｗルナ連れてさー本当羨ましいなぁ両手に花かよチクショー」
「そういう先生は？」
「え？先生は夏休みなんかねーからなぁ何が好きで書類と睨めっこしなきゃいけないんだか・・」
『先生も大変ですね』『シン、遊びに来たよー』
「おー噂をすればＷルナちゃんじゃないかぁ」
　相談室の入り口にはるなたちがいた。この２人はよく授業を抜け出して教室に入ってくる。
「今日はどんな言い訳で抜け出してきたんだい？」
「頭が痛いって」
　瑠奈は舌を出しながら頭に手を添えてジェスチャーをした。
「で、こっちは介抱役ってわけ」
「全く・・ 少ししたら戻れよ餓鬼ども」
「先生が可愛い生徒にガキなんてひどーい」
「はーい。それでシンは何してたの？」
「宿題も出したし、るなたちを待ってるだけだけど。二限まであるの？」
「ううん。今やってる授業終わったら帰れるよ、荷物置いてきちゃったけど」
「先生、私たちと海って何の話ですか？」
「だから、眞一くんが何も思い出作りしてないから三人で海でも行きなよって」
「先生にしては良いことというじゃーん」
「シンちゃんと海・・・ いいですね」
　水島先生の思いつきに二人は食いつく。こんな山奥に住んでいると海に憧れを抱く。俺も海水浴に行ってみたいな。
「俺もＷるなの水着見てぇな・・ あ、そうだ俺が引率してやるから四人で海に行こうぜ。その代わり親に許可得ろよぉ」

「えー先生連れてくのやだぁ」
「なんで嫌なんだよ！」
「そんなだったらお父さん連れていくし」「ねー」
キンコーンカーンコーン
話しは盛り上がっていたが、終業のチャイムが鳴る。「帰りのＨＲ出ないと」と二人は走って教室に向かった。波長の合う二人なんて久しぶりに見た気がする。数年前は二人ともあんなに仲が良かったのに・・ なんで今はそれぞれ恨み合う関係になったんだろう・・・
「先生、さようなら」
「じゃあ、また盆明けの夏休みにね。ちゃんと宿題やってこいよ」
「はい」
〜〜
水島は相談室の窓から外を見る。ブラインド越しだが校門の前にいる眞一とるなたちが見える
『シンちゃんお待たせ』『シン待った？』
『今日は二人ともうちに来なよ』『じゃあ午後ね』『何かゲーム持ってくよ。シンの家無いし・・・・
「・・・・ この村で恋愛は赦されないなんて・・ 可哀そうだな眞一くんは・・・」
水島は独り言のように悲しく言った。

2つの月

＊＊＊＊＊＊＊

『そういうことだから。眞一くんのことは諦めなさい。』

『いや！私はシンちゃんのことが好きなの！』

私はお父さんに呼ばれ、話を聞いた。この村の「しきたり」なので覚悟はしていた。私でなくてもシンちゃんを祝うつもりでいた。しかし、相手を聞いた時そんな思いは霧散した。

『るなも知っているだろう。もうすぐ高校生だろう、「執着」を捨てなさい。』

「……私、別れないから。あんな女に取られるくらいならこんな村出ていくから……」

パチンッ

乾いた音が部屋に響く。私は頬に触れ、痺れた痛みを感じた。

お父さんはとても優しい人で叱られたことを記憶していないほど温厚な父親だった。そんなお父さんが初めて手をあげた。

『いい加減にしなさい！』

『……っ』

私は襖を大きな音を立て閉め、そのまま外を出た。しばらく1人でいたかった。

なんで…なんであんな女がシンちゃんと…

＊＊＊＊＊＊＊

田舎の夏休みというのはとにかくやることがない。夏祭り、海水浴、花火大会…そんなものはマンガの中の世界に過ぎない。祭りは大人たちがやっている出店が少しあるくらいでお酒を飲む大人とは対照的に子どもは脇でゲームをしているのが毎年の風景だ。

海水浴は行かないわけではないが、外出届を出さなければならないため村の人々はあまり行きたがらない。外出届というのは学校のものではなく、そもそも村役場に出さなければいけないものだ。村民が都会に逃げ出したことがあり、外出は届出制となったらしい。

とはいえ、許可は簡単に出るため休日は近くへ買い出しに出掛け

る。前は最近できたショッピングモールに行ったが、店もそうだが人も多く人酔いしそうだった。
　そんな田舎での娯楽といえば・・・
「今日こそ勝つわよ」
「はっ、るなが俺に勝てるとでも？」
　眞一の部屋には眞一、るな、瑠奈の三人がいた。麻莉は友達の家に遊びに行っている。つまり、家にはこの三人しかいない。
　眞一とるなはゲームコントローラーを両手に持ち、いつもの対戦ゲームをしようとしていた。瑠奈はそんな二人の様子を見ていた。古いゲームのため３人対戦ができないのもあるが、瑠奈はこうしたゲームをやらないため普段から二人がゲームをやるのを眺めている。ある時眞一が見てるだけで楽しいか？と聞いたことがあったが、「うん。シンちゃんを見ているのはとても楽しいよ」といっていたのでそれからは眞一も何も言わずゲームに熱中している。
　二人はボタンとスティックを連打したり、忙しなく動かし、モニター上のキャラクターを動かしていた。２人扮するキャラクターは彼らの熱量を受けながら闘っていた。
「クソッやるな。るな」
「この日のために特訓したんだからっ当然でしょ！っと」
　るなの操作する屈強な軍人がキメ技を繰り出した。眞一が操作する拳法家はそれをモロに喰らい、地面に倒れた。
「あ・・・」
「よしっ久しぶりにシンに勝った!!どう？もう余裕なんてないでしょ？」
「１勝したくらいで調子乗んなよ。まだ本気出してないんだからな。これからだ！」
「よし！もう一回！」
　ｃｏｎｔｉｎｕｅを押し、再戦する。
「ねぇ、シンちゃん？」
「ん？どうした桑野」
　珍しく桑野が眞一に話しかけた。こんなことは初めてだった。前

述の通り、瑠奈は眺めているだけで話しかけるわけでも、漫画を読んだり別のことをしている訳ではなく、ただ眞一達がゲームをしているのをただ眺めているだけだった。そんな瑠奈がゲーム中に話しかけてきた。一体どうしたのだろうか？

「その・・・・ やってみてもいい？ゲーム、一回でいいから」

「え？別にいいけど」

どうもゲームがやってみたくなったようだ。瑠奈も見てるだけでは暇だったのだろう。そろそろ目も疲れてきたので俺はゲームコントローラーを瑠奈に渡した。

「やり方分からないからシンちゃん教えて？」

「お、おう」

俺は瑠奈の背後に回り、ボタンの説明をする。

ほぼ密着状態で興奮する。瑠奈はすごくいい匂いがした。この匂いを形容するのは難しいが、女の子の匂いって感じがした。無意識に顔が熱くなっていく。また、夏とあって薄着のため胸元がこのアングルから見えてしまう。いや、俺が見ようとしているのだが。

白いブラジャー的な何かが見え隠れする。一瞬るなの方に目をやると、ゴミを見るような冷ややかな目をしていたが、何も言う事なく視線をモニターに戻していた。完全に気づかれている・・・・ 後で怒られるだろうなぁ。

「あ、動いた」

瑠奈がスティックを動かすとキャラクターが動き、子どものようにはしゃいでいた。

「で、そこのボタンでパンチ、そっちがキックでそのボタンとスティック操作でキメ技ができる」

「キメ技って何？」

「んー、まぁ必殺技みたいなもんだ。ここぞという時に使うものかな」

「へぇ」

瑠奈は俺の説明に感心するように相づちを打つ。まだ初心者なので動きが不安定であるが、初めてにしてはできてる方だ。問題はるなの方だ。

「るな、桑野は初心者なんだからそんな本気ださなくても」
「本気じゃないわ。手加減してるつもりよ」
手加減しているとは思えないほど瑠奈の操作する女剣士をボコボコにする軍人。現実なら犯罪に近い絵面だ。
瑠奈は反撃の余地もなく、ＫＯされる。
「るな・・・・」
「シンちゃんいいよ・・十分楽しめたし」
「私、悪くないから・・・」
るなはつまらなかったとでもいいたそうな顔でジュースを飲み干す。
「おかわり持ってくるよ。その間適当に遊んでろよ」
「うん」
俺はお盆を持ち、部屋を出る。階段を下りて台所に向かい、冷蔵庫からオレンジジュースを取り出しコップに注いだ。
しかし、るなには困ったものだ。俺じゃなく瑠奈が相手だから早く終わらせようと初心者相手にボコボコにするなんて。瑠奈だって見ているだけではつまらなかったことくらいるなにも分かるだろうに。本当に大人げない奴だ。まぁでも瑠奈は満足そうだったし、今も対戦中だろうからゲームを体感しているのならそれでいいのか。次はまたるなの相手でもしてやろう。
そんなことを考えながら３つのコップをお盆に載せ、階段を上がる。すると部屋から怒号が鳴っていた。階段からでも聞こえるくらいの声だった。声の主は二人だった。どうも言い合いをしているようだった。止めに入ろうと部屋を入ろうとするが、
『シンは私のものなの！これだけはくーに渡さないんだから！」
るなの言葉で固まる。どうもゲームのことで喧嘩をしている様子ではない。今止めに行っても事態を混乱させてしまうかもしれない。そう思った眞一はただ立ち尽くすほかなかった。
＊＊＊＊＊＊
時間は戻り、眞一が部屋を出た後の部屋では二人は対戦を続けていた。先ほどの泥仕合とは違い、いい勝負となっていた。木原はふと言

葉を発した。
「ねぇ、くー。なんで初めてゲームをしたみたいな？ついたの？くー、あんた私のうちでやったことあるじゃない。」
　実は桑野は何度か木原の家で同じゲームを楽しんでいる。腕もそれなりにある。それなのに初心者かのように装う桑野に木原は内心怒りに近い感情を抱いていた。
「昔からくーはそう。何もできないお嬢様になりきって大人たちから可愛がられて…　私、あんたのそういうところ大っ嫌い。」
「るな、私そんなつもりないし。……　こうでもしないとシンちゃん、るなにばっかり構うもん！るなには分かんないよ！大人しい子の気持ちなんか」
　桑野はついに内に秘めた感情を爆発させた。それに触発され、木原も反撃する。
「何？その結果が〝駆け落ち〟なわけ？あんたの勝手でどれだけシンがひどい目にあったか分かってんの？あんたは座敷牢くらいで済んだかもしれないけど、シンはね……　村の男どもに殴る蹴るのリンチに遭って、学校でもいじめられるようになったのよ！シンをこんな目に遭わせてまだ私を悪者扱いするの？ほんと最低な女。」
「だって本当の悪党じゃない」
「なんですって」
「シンちゃんの許嫁、るなのお父さんが物言いしたんでしょ。るなのお父さん村では書記長だもんね。」
「何が言いたいのよ」
「許嫁……　あれ、コネでしょ？『執着』があるのはどちらかしらね。権力使ってシンちゃんを奪うなんて悪党じゃない」
「何言っているの…　あれは会議で決まったことで…」
「嘘！絶対るながシンちゃんのお嫁さんになりたいからってお父さんに口利きしたんでしょ！」
　木原は桑野の頬を張った。
「いい加減にしなさいよ！昔から何かにつけて私を目の敵にして！さっき私の気持ちが分からない癖にって言ってたけどこっちもよ。

くーには分からないわよ、比べられることの悔しさなんて！子どもの頃からずっとくーと比べられてきた・・・ 同じ名前ってだけで。頭もよくないし、性格は女らしくないし親からも「桑野さんちの瑠奈ちゃんを見習いなさい」って何回言われたか・・・ あんたには分からないでしょうね！

でも、シンは違った。シンは私のことを女の子として見てくれたし、私のことを褒めてくれた『元気で可愛い』って。それから比べられるのなんてどうでもよくなっちゃった。・・・・・・ 村の大人に可愛がられようが、媚びを売ろうが別に構わないけど、シンは私のものなの！これだけはくーに渡さないんだから！」

「私、シンちゃんのこと諦めないから・・・ 別にお嫁さんじゃなくても愛人だって」

木原は桑野にもう一発食らわせた。

「ふざけんなよ」

「さっきから痛えんだよ。可愛げがないからシンちゃんに嫌われるんだよ。」

桑野は普段の言葉遣いとは違い粗野な口ぶりで木原に仕返しのビンタを浴びせる。

「うるさい！このアバズレ」

「・・・・ っ・・ 髪掴むな。このメスゴリラ」

髪を引っ張る、顔を殴るといったとても女の喧嘩とは思えないバイオレンスな痴話げんかが繰り広げられていた。あまりの迫力でドアの外にいた眞一は声も出なかった。

あの二人が「死ね」だの「くそビッチ」など汚い言葉を発しながら、音が聞こえるほど殴打を繰り返している様はまるで地獄絵図だった。

二人の仲が冷め始めているのはなんとなく予見していた。瑠奈と話しているとき、るなは面白くない顔をしていたし、ここ最近の呼び方に固執する様子から見ても二人が対立していたのは俺でも分かった。しかし、ここまでになるとは思わなかった。俺と一緒にいる時は仲がいいように装っていた。今日の学校でもゲームをしている間も・・・・ だが、遂にそれも限界に達し素の姿がここにあるのだろう。

「シン、そこにいるんでしょ」
突き刺さるような底冷えした声が部屋の中からした。るなからだった。
「入って」
俺は素直にドアを開けると髪を乱し、顔にはあざができた二人がいた。るなは廊下に置いてきたコップを突然ドアの取っ手に叩き付け、割りその破片を俺の喉仏に突き立てた。
「シン、答えて。私とくーどっちが好き?」

月蝕（前編）

埼玉県の北部。そこには他の自治体との交流が断たれた村があった。

「コミューン」

―本来は自治的共同体のことを言うが、共産主義運動の発展から共産主義的な運営体制、村を現わすことが多くなった。コミューンの草分け的存在であるのが、かの有名なパリコミューンである。その後ソビエト連邦や中華人民共和国のような共産主義国家が誕生し、日本でも共産主義運動が戦後盛んになると資本主義を倒すという過激派と小さいながら共産主義政権を打ち立てようという穏健派に分かれるようになった。その穏健派が地方の山奥で農村を開拓したものが日本におけるコミューンである。

眞一の住むこの村も全共闘世代の親たちが資本主義の都会から離れ、山を切り拓き田や畑を作って出来上がった自給自足の共同体である。コミューンは会議制で先3年の生産計画を立て、誰が何を幾つ生産するかが完全に管理されている。ちなみにコミューンの心臓である中央委員会の書記長は木原るなの父である。また、資本主義社会との交流を断つために外出は届出制であり、脱走はコミューンでは罪である。恋愛も禁止であり、結婚相手は基本会議で誰が誰と結婚するかを決めることとなっている。もし、結婚相手に文句を言えば「執着を捨てろ」と言われ拒めば粛清される。

そのコミューンの鉄の掟を破ったのが、眞一と瑠奈であった。はじまりは瑠奈が眞一に告白をしたことからであった。その時、まだ眞一にも瑠奈にも結婚相手は告げられていなかった。

「シンちゃん、好きです。付き合って下さい」

「少し… 少し考えさせてくれないか?」

「うん!幾らでも待つよ。」

「……」

桑野が告白するところを憎々しく遠くから見ていた者がいた。それは木原だった。

「チッ・・ シンは私のなのに・・・ 抜け駆けなんて許さない・・・」
その後、2人は付き合うこととなった。付き合うと言っても、田舎で出来ることなど登下校やおうちデートくらいのものである。それまでの日常となんら変わりなかった。一人を除いて・・・・
「るな、たまには一緒に帰ろうよ。いいでしょ?シンちゃん?」
「え?うん」
「ごめんねくー、シン。私、部活あるから先に帰ってて。それにお二人さんの邪魔をするのもね・・・ シン!ちゃんとくーを家に送るのよ!」
「お、おう。分かったよ・・・」
「ほら、行こシンちゃん」「うん」
手をつないで帰る2人を笑顔で見届ける。そして、姿が見えなくなると誰もいない教室で木原はバケツを蹴り上げた。
「クソクソクソクソ!!!あの雌豚・・・・ シンに媚売りやがって。シンもシンよ!鼻の下伸ばしちゃってさ。あの女がいなければ・・・・
いつもいつも私の邪魔ばっかりしやがって・・・
ユルサナインダカラ」
思えば木原の人生はいつも桑野と比べられてきた。桑野は子どもの頃から大人しい子で、やんちゃで男の子のような木原は「少しは桑野さんところの瑠奈ちゃんを見習いなさい」「なんで瑠奈ちゃんみたいに大人しくできないの!」といつも比較の対象にされていた。子どもからすれば自己否定に近いものだった。そのうちるなは誰からも愛されていないと錯覚し、段々と元気がなくなっていった。
＊＊＊
ある時、眞一が野球にるなを誘ったことがあった。
「るなー野球しようぜ」
「いや・・・・」
「なんだよ。前は普通にしてたくせに・・ 瑠奈ちゃんは球とれないから相手にならないんだよ・・・」
「・・ っどうせ私はくーみたいに女の子っぽくないんでしょ!シンもそうやって・・・・」
「別にそんなこと言ってねぇだろ!それにるなはかわいいじゃん!元

気で笑ってる顔がすごくかわいい！」
「え・・・」
「だから泣くなよ。瑠奈ちゃんとるなは違うんだし。」
眞一は今にも泣きそうなるなの頭を撫でて慰めた。
「（シンがかわいいって・・・ 私のことかわいいって・・）」
＊＊＊
それから木原は元の男っ気のある少女に戻った。ただ恋愛禁止の掟をずっと守っていた木原はその恋心をずっと隠し過ごしていた。そんな木原からすれば桑野の告白は掟を破っただけでなく自分から眞一を盗った泥棒猫でしかなかった。眞一をとられた木原にできるのは桑野を妬み恨むことそれだけだった。
1年前、これまでの関係がひっくり返る事態が起きた。それは会議による結婚相手の策定であった。眞一たちもうすぐ立志の少年少女は9人ほどで、残りの1人は上の年齢の者と結婚することとなっていた。眞一と二人のルナが組まれる確率はさほど低くなかった。そうした環境の中、縁組が一つの会議によって決定された。
『坂下眞一・木原るな』
眞一の相手は木原に決定した。この決定を目にした木原はやっと報われたような気分になった。これで公私ともに認める仲になれた。眞一が自分のものになったと木原はこれまでになかったくらい喜んだ。一方で現彼女である瑠奈の心境は穏やかではなかった。瑠奈は爪を噛み、
「るなの仕業だ・・・ 権力を使って私とシンちゃんの仲を引き裂こうとしたんだ・・・」
実際、そのような事実はなかった。これは会議で公正に議論した結果なのだが、この出来事が3人の友情にしこりを生むことになる。
「おはようシン！」
「・・・ おはよう」
次の日、家の前に木原がいた。瑠奈と付き合うようになってからは別々に登下校することが多かった木原がセーラー服を着て自転車に乗り迎えに来た。その理由はなんとなく分かっていた。芯は真面目

な木原だ。おそらく許嫁になったからだろう・・・ 眞一は支度を済ませ、自転車を引く。
「瑠奈を迎えに行くけど、ついてくるか？」
「え？なんで？」
「なんでって・・・」
「シンも知らないわけじゃないでしょ？もうシンと私は伴侶になるんだよ。くーのことなんでどうでもいいでしょ？」
「どうでもってそんな言い方・・・」
「何？くーのが大事な訳？シン、『執着』を捨てないといけないよ。もう大人になるんだから」
　この村では中学を卒業すると強制的に家業を継ぐこととなっている。眞一の家は農家、木原家は酒屋であった。婿養子ではないので木原は農家に嫁ぐことになる。徹底された計画経済の中で大きな敵は「地位への執着」「欲への執着」など様々な『執着』だった。木原は子どもを諭すように眞一を諌める。
「あのさ・・・ 木原」
　眞一は閉ざしていた口を開いた。
「縁談が始まるまでは瑠奈とも木原とも友達でいたいんだ。この時間は今しか過ごせないしさ・・・」
「・・・ はぁ。分かった。シンがそういうなら今は友達でいてあげる。でも忘れないで？私がシンの恋人だってこと。ほら、くーを迎えにいくわよ」
　木原はペダルをこぎ、桑野家に向けて自転車を走らせた。それを追うように眞一も自転車をこいだ。
　その日、桑野は学校に来ることは無かった。迎えに行ったものの桑野の母が「今日は学校行きたくないみたいなの。昨日お父さんと喧嘩してね・・・」と説明をしてくれてその日は木原と学校へ行くこととなった。
　しかし、次の日もその次の日も桑野は学校に来なかった。眞一はプリントを桑野の家に持っていく事になった。
「お邪魔します。」

「あら、眞一くん。今日もありがとうね。瑠奈は今日も部屋から出てこようとしなくて」
「ちょっと部屋に行ってもいいですか？」
「いいけど・・・　多分出てこないと思うわよ。」
「いいんです。少し話がしたいだけなので」
　眞一は瑠奈の部屋の前に立った。
「瑠奈、いるんだろ？」
「シンちゃん・・・・？」
　扉の向こうから小さな声で反応があった。
「瑠奈・・・　俺、木原と結婚することが決まった。でも、今は友達でいようって約束して、木原もそれでいいって言ってる。だから、さ。また仲良く3人で遊ばないか？」
「そんなの嫌！」
　あくまで友達としてやり直そうとする眞一の誘いを拒否する。
「シンちゃんの彼女でいられないなら・・・　私死ぬよ？」
「!?何馬鹿なこと言ってんだ」
「本気だよ！シンちゃんと結ばれないなんて死んだも同然だもん！いや！別れるなんて！シンちゃんは私の彼氏だもんっ！」
「・・・・　とりあえず開けてくれ」
　眞一がそう言うとガチャっと解錠音がし、扉がゆっくり開く。中から瑠奈が出てきた。目は真っ赤に充血しており、髪も乱れていた。
「シンちゃん・・・・」
「俺も瑠奈が好きだ！でも、ここじゃそれは叶えられない・・・」
「じゃ、逃げようよ」
　眞一は「なっ・・・」と驚いた。つまり村から脱走しようと言い出したのだ。村の脱走は大罪であった。捕まった時の仕打ちは言葉にならないものである。しかし、愛するものの願いを断ることはできなかった。眞一は静かに首を縦に振る。眞一は部屋に入り、瑠奈と脱走計画を企てた。プランは深夜に各家を出発し、竹林まで向かって山を下るという計画だった。竹林は傾斜が急で監視が甘い。また、ひと気がないので人と出会う確率も低いことから竹林からの脱出にした。実行

は4日後、2人で脱走の準備を進めていった。
「最近シン、くーの家よく行くわね。何してるの？」
　実行2日前、木原が休み時間にそんなことを聞いてきた。友達に戻ろうと言っておきながらここずっと木原にかまっていない。不審に思った木原は眞一に疑問を突きつけた。
「その・・・ずっと学校に来てなかったからさ。勉強教えてるんだ」
「ふーん。シンが、ね・・・私も付いてきていい？」
「え？いや、その・・・」
　これは困った事になった。今日も脱走計画を練ろうと思ったのだが、木原が来るとなると今日は作戦を立てることができない。
「どうしたの？私がいちゃいけない理由でもあるのかしら？」
「いや、そうじゃないけど・・・」
「じゃあ、くーの家行っていいんだね？」
「あ、えーと・・・いや、そのまだ瑠奈、木原と会うのは怖いって言ってたし。もうちょっと待ってくれるかな・」
「そう・・・まぁいいけど。あんまり変なことしちゃダメだよ？シン」
『シン』という発音が非常に冷めたものだった。木原は訝しげに見ていたが、なんとかやり過ごすことができた。
　そして、決行の時がきた。水や懐中時計、当座の食料などを入れたリュックを背負い、窓から家を出る。そのために事前に靴を部屋に持ってきた。ゆっくりと降りて集合場所の祠に向かう。足音を立てないよう走ると祠が見えてきた。まだ瑠奈は来ていないようだった。しばらく待つとパタパタと瑠奈がやってきた。
「はぁはぁ・・・お待たせ」
「誰にも会わなかったか？」
「うん。大丈夫！」
「時間がない。急ごうか」
　2人は竹林の方に向かった。進むにつれ、街灯はなくなり暗がりの状態で畦道を走っていく。はぐれないよう手を繋いで瑠奈をひっぱっていった。
「ここを下れば、村から出られる」

「それでやっと2人きりになれるんだね・・・」
「うん。一緒に逃げ延びような」
「うん！」
「じゃあ、行こ・・・
『何してるの？』
急にパッと光が当てられる。バレてしまった・・・!!
恐怖と驚きの中で光の先を見ると、そこにいたのは木原だった。
「木原・・・」「るな・・」
木原は開口一番に蔑むように
「・・・・ 嘘つき」
と言い放った。
「言ったよね？シンの恋人は私だって。これはどういうこと？シン、あんたこの罪の重さ分かってるの？」
「分かってるさ・・・ 昨日からずっと怖かった。でも、瑠奈が望むなら俺は・・・」
「そう・・・ くーが火をつけた訳ね・・・」
「るな！勝手なことは分かってる！でも、見逃して！私シンちゃんが・・」
「うるさい！この泥棒猫!!」
木原は怒り混じりに叫んだ。
「ごめんね。シン、でもシンが悪いんだよ？私を騙したんだから。ちゃんと償ってもらうから、ね？」
木原の言葉に嫌な予感がした眞一は瑠奈の手を取り急いで竹林を下った。しかし、急に視界が反転する。何が起きてるんだ？気がつけば眞一は大人たちに取り押さえられていた。
「捕まえたぞ！」「このガキィ」
ヘッドロックをかけられた状態であばらや脇腹を蹴り上げられる。瑠奈も腕を押さえられ拘束されていた。その後は想像を絶するほどの地獄であった。
『この馬鹿者がっ！』
「ガッ！グフッ・・・」

父親を含む大人数人に木製バットやら角材でシバかれた。一撃目に頭をやられ、腕や腹部を攻撃されるも意識が朦朧として痛みも段々と感じなくなってくるほどだった。気絶すると水を顔にぶっかけられ、寝ることすら許されなかった。大人による制裁を受け終えた後も：

「この反逆者」「恥を知れ」

中学で同級生からいじめをうけた。放課後呼び出され、サンドバッグのように殴る蹴るといった暴力を受け続けた。しかし、眞一は耐えた。自業自得であるし、木原を裏切った罪滅ぼしになればと思った。ただそれも限界がきた。眞一は自殺を図る。しかし、未遂に終わり妹・麻莉は兄を冷ややかな目で見るようになった。また麻莉は仲の良かった眞一と瑠奈を引き裂いた木原に恨みを持つようになった。

桑野瑠奈はというと、拘束された後、桑野家の座敷牢に閉じ込められた。ただ3日程度であり、折檻を受けたりしたわけではなかった。というのも、眞一が全ての罪を被ったからだ。誘ったのも計画したのも全て自分であると自白したのだった。

その後、眞一は保健室登校となり桑野と木原は眞一の前だけ仲良く接し、2人だけの時は険悪な状態が続いていったのだった。そして、遂に両者の怒りが爆発した。

（後編に続く）

月蝕（後編）【終】

「シン、答えて。私とくーどっちが好き？」

男女三人しかいない密室の中で眞一は修羅場に突入していた。喉にガラス片を突き付けられている。木原の手はガラスで切れ赤い血が腕をつたい流れているが、意にも介さず無表情で迫っていた。その向こうでは桑野が今にも泣きだしそうな顔でこちらを見ていた。先ほどの喧嘩で部屋は嵐が通り過ぎたかのようになっており、廊下には割れたガラスとジュースの入ったコップとお盆が散乱していた。

眞一は重大な決断を迫られていた。大人になることを拒絶するように瑠奈を切ることを保留し続けてきた。いずれは彼女の告白を断り、るなを受け入れなければならない。それはこの村を生きていく上で必要なことであり、一度道を外した眞一がもう一度復帰するための使命でもあった。しかし、瑠奈を悲しませることに躊躇いがあり、木原にはしばらくは二人と友達として接したいと願い出た。るなもそれを許し、この関係を続けていたがそれは二人にとって耐え難いものだったようだ。その予兆に気づいていたが、見て見ぬふりをしていた罰なのだろうか。眞一は思考停止状態になっていた。

「どうなのよ、シン。だんまりなんて許さない」

「シンちゃん・・・・ 私のこと好きだよね？」

頭が真っ白だが、眞一に考える時間はなかった。瑠奈も蝉に負けるようなか細い声で返答を待っていた。

「シン、分かってるよね？」

「るな！そんなのずるいよ。シンちゃんの本心が聞きたいの」

「うるさいわね！元はと言えばあんたが告白なんてしなければ・・・・・シンは私と早く結ばれてたのに！」

「ま、待ってくれ」

それまで弱気だった瑠奈が声を張り上げ、それに反応したるなを見て我に返った。先ほどの素手喧嘩とは違い、今は鋭利な凶器を持っていて刃傷沙汰になりかねなかった。興奮しているるなを宥め、眞一はハッキリ伝えた。

「俺は・・・・〝ルナ〟が好きだ」

その言葉はこれまでの優柔不断な眞一にはなかった歯切れのよさを持つものの曖昧さを内包していた。るなは首元にかざしていたガラス片を下げ、眞一に向き合った。しかし、鬼の形相は崩すことはなかった。しばらく部屋には蝉のなき声が響くだけであった。緊迫した空気が流れる中、瑠奈が口を開いた。

「シンちゃん、それって私のこと?それとも・・・・ るなのこと?」

「ルナはルナだよ」

眞一のそんな答えに木原は「シン」と声を掛け懐に潜り込むように視線を合わせた

「そんな答えで納得すると思ってるわけ?私は真剣に聞いてるのに、ふざけるのも大概にしないとダメよ。」

るなは「まぁでも」と紡ぎ、血塗れになった右手を眞一の頬に添えた。

「どのみち、シンは私の旦那様になるんだもの。ちゃんと示しを付けないと、ね」

そう言い、るなは唇を眞一の口に寄せた。

眞一は「ごめん」と言い腕を木原の肩にのせ、寸前で接吻を止めた。無であったるなの顔色は驚愕に変わった。接吻をとめられたことをひどく驚いたようで後ろに退いた。

「なんで!シンは私のこと嫌いなのっ?!私はこんなに好きなのに。瑠奈なんかよりもずっとずっと好きなのに・・・ !」

「違う!違うんだ・・・ 瑠奈は最初に告白してきてくれた彼女で料理もできて麻莉にも優しくしてていい子だと思うし、るなも憎まれ口叩くけどたまにか弱いところがあって守りたくなるしずっと俺なんかのことを想ってくれていて嬉しい。許婚のことも別に嫌じゃない・・・・だからさ。そんなことすぐに決められないよ。俺は最後の自由なこの時間は3人で昔みたいに仲良く過ごしたいんだよっ!」

「・・・ どっちも好きってこと?でもシンも分かってると思うけどそん

なこと許されないんだよ。ここ（村）で生きていくには執着を捨てないといけないんだから」
「そんなこと分かってるよ！でも、好きって気持ちはどうしようもないんだよ。なんで、なんでこんな苦しい気持ちにならないといけないんだよぉ」
眞一は泣き崩れた。無理もないだろう。一般社会では眞一のような思春期の少年は好きな女の子と遊んだり自由に恋愛をする自由がある。しかし、このコミューンという閉鎖された統制社会の下では少年は早く大人にさせられるのだ。選択の自由もなく、一生決められた枠の中で生きていくことを強いられる。１４か１５の男子とてまだまだ強くはないのだ。
木原は膝をついた眞一を通り過ぎ無言で部屋を出た。桑野は「シンちゃん…」と声を掛けるが、反応はなかった。無言で立ち去る木原を追い、部屋には眞一だけが取り残された。
＊＊＊＊＊＊＊
「ただいま」
麻莉が帰ると眞一は居間でテレビを見ていた。ぼーっと座っているのは普段のことであったが今日はやけに疲れているような気がした。麻莉は手提げバッグから宿題を取り出していた。
「お風呂沸いてるから先入れよ」
眞一は視線を変えずそれだけ言い、また黙り込んだ。
それから兄妹で会話が生まれることもなく、両親が帰ってきて夕食となった。今日はそうめんだった。ボウルに無造作に入った麺を箸でつまみ麺汁の入ったガラス器に運んでいた。夏になると珍しくもない作業を眞一は無気力に行っていた。
ピンポーン
居間にベルの音が鳴った。眞一はなぜか胸騒ぎがした。そう高くない可能性のはずなのに自分が考えていることが的中するのではないかという戦慄を覚えた。
「お母さん、お客さん」
「わかってます。はーい」

母は箸を置き、玄関へと向かった。ここからでも声は聞こえる相手は女の人であった。
「▪%^ ∝#$」
「うん。うん・・・・ えっ」
眞一は不意に聞き耳を立てていた。客人の言葉は聞こえなかったが、母のリアクションの一つ一つが眞一を苦しめた。すると、廊下を歩く音がし、母が戻ってきた。
「ちょっと、眞一。るなちゃんのお母さんが来てるんだけど。話を聞いてくれないかしら」
「うん」
るなの母と聞き、一気に顔色が青ざめたような気がした。内臓も熱を奪われたように冷たい血が流れる感覚がした。そろりと玄関に向かった。
「眞一くん」
そこには木原のお母さんがいた。顔には焦りの色が見えた。
「るなを知らない?確か眞一くんの家に行くって言っていたんだけど・・」
「るななら、3時くらいに帰りましたけど・・・」
そう言うと、木原のお母さんは血相を変え、
「帰ってきてないのよ!もうこんなに暗いのに・・・ どうしたのかしら!」
「え、、」
るなはウチを出てから家に帰っていないらしい。眞一の頭の中は良くない考えが巡っていた。
「眞一くん、るなが何処へ行ったか聞いていない?!」
「聞いて、ないです。・・・ ごめんなさい」
「・ そう。どうしたのかしら。警察に相談したほうがいいのかしら・・」
こんなに困惑した木原の母は初めて見る。普段はるなのように楽天家で自分にも優しく接してくれる人である。それがこんなに取り乱すということは異常な事態ということだ。眞一は、重い口を開い

た。
「おばさん、実は・・・」
いいかけたところに息を切らして婦人が走ってきた。
「はぁはぁはぁはぁ・・ 眞一くん、って木原さん。もしかして・・・」
「えっ、瑠奈ちゃんももしかして家に帰っていないの!?」
「そう、そうなのよ・・ 寄り道なんかするような子じゃないのに。何処へ行っちゃったんだろう・・ もしかして人攫いにあったんじゃ」
現れたのは桑野のお母さんだった。同じく瑠奈も家に帰っていないらしい。眞一は残念な確信をした。
「あの、木原のおばさんも桑野のおばさんも聞いてください・・・・ 実は今日2人は凄い喧嘩をして・・・・ 俺止めたんですけど、上手く・・・ いかなくて、もしかしたら2人はその続きをしてるんじゃないかなって・・・・」
「えっ」
「それは本当なの!?眞一くん」「瑠奈がるなちゃんと喧嘩だなんて」と2人は混乱していた。眞一はただ肯定するしかなかった。とは、いえ2人の所在を知るわけがなく眞一は2人と大人たちを含め村中を探した。なんの手がかりもなく、学校や遊び場などをあちこち捜索したが見つからなかった。
「どうしよう、どこへ行っちゃったの・・・ あの子が居なくなったら私・・・」
そんな言葉に眞一はかける言葉が見つからなかった。夏とはいえ辺りは真っ暗になり余計捜索が難しくなった。
「もう遅いし、警察に相談して明日また探そうか」
ある大人がそんなことを言うと、瑠奈の母は泣き出しそうに
「そんな!あともう少しだけっ。瑠奈ちゃん、暗くなって怖いだろうし、お腹空いてるかもしれない・・・」
そんな様子を見て、眞一はふと思いついた。
「すいません。最後に竹林を探しませんか?」
「竹林っていうと、あそこのかい?脱走ってわけじゃないし、それにこんなに暗いし」

「お願いします！少し探してダメだったらそれでもいいんで！」
眞一は頭を下げてお願いした。
「私からもお願いします・・・ どうかるなを見つけてください」
木原のお母さんも頭を下げ、今日最後に竹林を探すことになった。
眞一は大きな声で「るなー」と叫ぶが辺りは殺風景で返答も無かった。懐中電灯を持ちながら茂みを掻き分け進む、見えてくるのは竹藪ばかりであった。
「るなー」
さらに進むと、黒い影が前方に見えた。その影に向かうと人であることが分かった。るなだろうか、それとも瑠奈だろうか。どちらでもいい、どちらかが助かっていたら、高まった動悸を落ち着かせることができるような気がした。
「るな、そこにいるのか!?」
「!?」
その影は驚いたように見えた。眞一は懐中電灯をかざし、その人影に向けた。

それは木原るなだった。
「るな！」
眞一はるなのもとに駆け寄り抱きついた。しかし、るなの反応は予想外のものだった。
「え!?誰ですか、やめてください！、怖い！」
「えっ、るな・・・ ？」
「〝ルナ〟って誰ですか？」
眞一は訳が分からなかった。自分の名前を誰と言っているのだ。冗談だと思ったが、るなは困惑していた。
「眞一、見つかったのか？」
『おーい、木原さんところのるなちゃんが見つかったみたいだぞー』

そうこうしていると、父たちが応援に来た。
「お父さん、る、るなが・・ るなが」
「見つかったな。偉かったな。」
そうじゃない。見つけたこともそうだが、もっと大きなことを伝えたかったが眞一の整理がつかなかった。
「るな!もう馬鹿、心配したんだから・・・ でも良かった、無事で」
「お母さん・・・ ここはどこ、ルナって誰?」
「え?るな、何言ってるのよ。冗談でも笑えないわよ、」
「分かんない・・・ 分かんない分かんない。みんな言ってることが分からないよ!」
母の腕に抱かれ、るなは泣いてしまった。
錯綜したまま捜索は終わった。
＊＊＊＊＊＊＊
あれから3ヶ月が経った。夏休みも終え、二学期が幕を開けたわけだが学生相談室には水島先生の他に新たなメンバーが加わった。
「るな、水島先生だよ。覚えてるかい」
るなはふるふると横に首を振った。
「・・・」
「私はここの先生の水島です。木原さんよろしくね。」
「・・（こく）」
2人の失踪、それがもたらしたものは大きかった。木原るなは発見されたが、病院での精密検査の結果記憶喪失と判定された。原因は不明だが、ショック性の記憶喪失だそうだ。明るかった性格も一変して、極度の人見知りとなり眞一の側にずっといる。眞一がトイレの時も犬のように入り口で待つなど、まだまだ元の生活に戻るのは難しいようだ。
眞一はというと、るなと同棲をはじめた。記憶喪失とはいえ、許婚であることは変わらず記憶を取り戻すきっかけになればと先月からるながうちへとやってきた。折り合いの悪かった麻莉とも上手く接していて、るなとはまた違う女の子と暮らしているような気分である。

桑野瑠奈は残念ながら今もなお行方をくらましている。桑野のお母さんは今でも村じゅうを探し回っているのを見る。残念ながら竹林で何が起きたのか今も分かっていない。眞一は決断を誤った罪悪感に満たされていた。今自分にできることはるなのそばにいること。眞一は自分に言い聞かせ、学校や村でるなの世話をしている。

水島は眞一の肩をポンと叩いた。

「覆水盆に返らずだ。前を向いて進んでいこう」

「・・・はい」

「シンイチは教室で、授業、しないの・・・？」

「うん。ずっとここで受けてたからこれからはるなと一緒だよ」

るなは眞一のことを「シンイチ」と呼んでいる。思えば、るなが「シン」と呼んでいたのも「シンイチ」と呼ぶのが長いからだった。

「えへへ、嬉しい。シンイチと、授業。」

るなの無邪気な笑顔を見ると罪悪感が込み上げてくる。

「ごめんな。るな・・・」

それは眞一の口癖のようなものになっていた。るなは聞き飽きているかもしれないが、眞一には何度謝っても償い切れないものであった。

「シンイチ、もう謝らなくて、いいよ」

るなが慰める、るなは「だって」と続け

「”シン”とやっと結ばれたんだもん。本当の”ルナ”になれたんだよ。」

「・・・え？今なんて。」

「・・・？シンイチ？」

「いや、何でもない」

村には北風が吹き込みはじめ、また新たな季節が巡ってくる

fin